

2022年6月12日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「神の前に留まりなさい」

聖書：コリントの信徒への手紙一2:1～5

カトリックの聖人にフランチェスコという方がいる。1182年にイタリア・ウンブリア地方のアンジの町に生まれ、今年、生誕840年の節目にあたる。彼の有名な「小鳥への説教」がある。

「小鳥よ、あなたたちはすばらしい衣服を／身に付けている。私はよれよれの修道服を着ているが、これとて自分で手に入れたものだ。ところがあなたたちの衣服は自分で心配したものではない。あなたたちは透明な声で鳴くが、それもまた、いい声になろうとしてなったわけではなく、神様がくださったものだ。素直なあなたたちには、大きな恵みがある。」この「小鳥への説教」は、マタイ福音書の言葉に影響し、彼自身も大きく影響を受けた。金銀を追い求め、人を蹴落とし、より上を目指す、世の中の生き方ではなく、野の鳥が神に委ねて美しく生きているように、フランチェスコもそのような生き方をまさに実践したのである。

ただ、もともとそういう聖人的な生き方をしていたのではない。当時イタリアが隣国と戦争を始めると、自ら騎士(兵士)になると言い出し、名誉を求めた。しかし戦争の悲惨さ、地獄を見た彼は自分の生き方が変わって行く。

神の前に留まる生き方へ。この生き方は何か世間からかけ離れた、山奥に住んで隠遁生活をするという事ではない。彼は改心した後、ハンセン病患者の隔離村へ行き、そこで生活を共にして患者のお手伝いをする。また無意味な戦争に異を唱えて、平和のために発言し、行動する人でもあった。彼の生き方は多くの人々に影響を与え、インドの解放・独立の父と呼ばれるマハトマ・ガンジーや貧民・孤児・病人の救済に身を挺したマザー・テレサなどに多大な影響を与えた。

神の前に留まるとは、あなたの“ありのままでないさい”ということである。キリストは、今のありのままのあなたを受け入れてくださる。あなたのありのまま、神のみ声に耳を傾けて、主の言葉に揺さぶられ、問いを投げかけられて歩むということである。

さらに「フランチェスコの平和の祈り」がある。毎週月曜日に行っている「普天間基地ゲート前でゴスペルを歌う会」でも、会の初めにこの「平和の祈り」を捧げてから始めている。この祈りは世界で祈られている。ゲート前で歌う当会は、2012年10月から行われ、今年10年を迎える。何故、基地のゲート前でゴスペルを歌うのか？赤いのぼりを掲げて、「NOオスプレイ、NOレイプ、NOベイス」と掲げて、平和の祈りと讃美歌を歌う。それは、キリストの前に留まるからこそ、このような平和の問題、社会の問題に留まり、考えて行く必要が生まれて来る。キリストご自身が、社会の小さくされた者の側に立っておられたからであり、主の言葉に心揺さぶられているからである。(神谷)